

# 「原点回帰——複業で地域を支える」をテーマに 第14回建設トツプランナーフォーラムを開催

## 建設トツプランナー倶楽部

建設トツプランナー倶楽部（代表幹事＝米田雅子・慶応義塾大学特任教授）は6月28日、都内で第14回建設トツプランナーフォーラムを開催した。今回のテーマは「原点回帰——複業で地域を支える」。人口減少が進む中、複業によって地域防災や地域の担い手・守り手として建設業の存在がクローズアップされるフォーラムとなった。

### 複業で地域を支える

同倶楽部は2006年、公共事業が減少する中、新分野に進出する建設経営者の集まりとして発足。同年から年1回、全国規模のフォーラムを開催（1回目は全体ワークショップ）しており、今回は建設経営者を中心に約300人が参加した。

冒頭、代表幹事の米田氏は「建設トツプランナー倶楽部は、インフラの町医者をめざして、地域防災の担い手、社会インフラの守り手、複業による雇用の支え手として活動してきた。今回は原点に戻り、複業で地域を支える企業の発表を行う」と挨拶。過疎地域では市場規模が小さく、専業による企業の自立は難しいため、複業は地方創生の有効な手段

にもなるとしている。

### 複業の先に 地方創生は見えてくる

フォーラムは「農業などへの複業化」「高齢化社会を支える地域建設業」「再生可能エネルギー・環境事業への進出」「大震災からの復興——地域材を使ったスクラムかみへい住宅」の4部構成。まず、第1部「農業などへの複業化」では、「地域を支える多角化経営（建設業×畜産）」（森建設＝鹿児島県）、「お家周りの町医者とアグリファーム福渡」（小坂田建設＝岡山県）、「地域の守り手・ストックビジネスや農業に展開」（太啓建設＝愛知県）の三つの事例報告が行われた。

鹿児島県鹿屋市輝北町という高齢

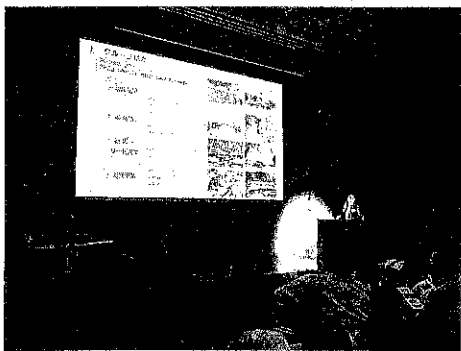
化が進む場所に本社を構える森建設では、本業に加え、畜産業、運送業、観光業、さらには海外（ベトナム）にも進出。畜産業では肉用牛の生産、繁殖、肥育（飼養頭数約6000頭）を行い、飼料の輸入や飼料運搬まで行う。畜産業の複業化によ

って、畜産農業施設を中心とする民間工事受注につながり、自社の公共工事と民間工事の受注割合はこの10年で逆転したという（07年・公共工事70%、民間工事30%、18年・公共工事25%、民間工事75%）。

森義大社長は「輝北町という場所に本社を構え、事業を営んでいくためには多角化経営せざるを得ない。しかし、それを逆手にとって、複業化して効果を高めていくことが地域への貢献につながっていく。複業化の先に地方創生は見えてくるのではないか」と話した。

### 「お家周りの町医者」

小坂田建設があるのは岡山市北部の建部町。人口約5600人、高齢化率が40%を超える過疎高齢化地域



「地域を支える多角化経営（建設業×畜産）」について事例報告を行う森建設。

だ。公共事業の削減等で売上が低下した同社では09年から「地元地域の個人のお客様の工事」を受注する活動を開始。まず行ったのは自社PRのためのイベントの開催だった。チラシを作成し、地域2500戸に配布、イベントでは飲食やゲーム、さらに建設機械や工事車両に触れたり乗ってもらい、建設産業を身近に感じてもらう機会にしているという。

個人の客は、建設会社は数万円の小さな仕事はしないとちえがちだったが、同社では積極的に地域の困りごと仕事を受注することにし、現在は年間約160件の大小の仕事を受注している。

「お家周りの町医者」として、当初は過疎高齢化が進んだ地域では仕事はないと考えていたが、①高齢化（介護車が入れるようにスロープをつけてほしい、家の周りの草刈り）②過疎化（住まなくなった家の解体、田畑の管理）③少子化（水田を代わりに耕作してほしい、不要物の処分）④業者の空洞化（廃業・倒産）（墓の修繕、玄関の鍵の修繕、車庫建設）⑤中山間地域独特（家の裏山が崩落しないよう修繕、鳥獣害対策の柵の設置）——など多様なニーズがあるという。

以前はこれらの仕事は断っていた。小坂田英明社長は「現在は、お客様のご困りごとを建設技術とそのネットワークで解決して対価をいただく『建設サービス業』の考えで取り組んでいる」と話した。

同社では、特に農地維持の相談を受けることが多くなったため12年に「農業生産法人株式会社アグリファーム福渡」を設立、農業分野に進出した。その想いは①地域の耕作放棄地を少なくしたい②社員の退職後の働く場を確保したい③地域の元気な高齢者の働く場をつくりたい、の3点。年々耕作依頼が増え、現在は11町歩まで拡大し、今後は20町歩以上に拡大する見込みだという。

昨年7月に発生した西日本豪雨災害では、道路啓開や応急復旧作業で同社の車輛や重機が活躍。小坂田社長は「地域建設企業は、様々な地域課題に取り組み、持続可能な地域社会の構築に寄与していかなければならない」と再認識した。過疎高齢化先進地域の建設企業として地域に継続してかかわり、地域になくてはならない企業づくりに取り組んでいく」と話した。

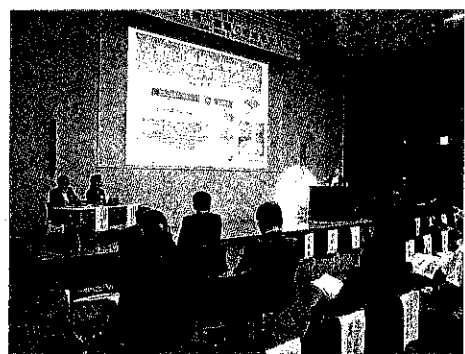
太啓建設ではストックビジネス（不動産開発、メガソーラー発電事

業など）やアグリビジネスを展開している。アグリビジネスには11年4月に進出し、水稲やイチゴの栽培、地元JAとの連携事業を実施。永田雄司常務は「地域の建設業は、技術やノウハウに加え、専門的な人材や機材を持ち地域の状況を熟知していることから、地域におけるさまざまな役割を期待されている。複業による新分野への進出を活性化させ、地域のニーズの新たな担い手としての役割を果たしていく」と話した。

### 地域になくてはならない 独自のオンリーワン企業に

第2部では、介護部門に進出したセントラル建設（岐阜県）と、介護事業や介護病院建設で地域を支えている美保テクノス（鳥取県）が登場した。セントラル建設は公共事業減少・要介護者増から介護用品レンタル業に進出。在宅介護が増えればベ

ットやトイレ、手すりなど家のリフォーム需要が増す、つまり「必ず建設と介護のシナジーが起こる」と考えたという。実際に、介護レンタル業の売上に比例して住宅改修の売上も右肩上がりに。阿部伸一郎社長は、建設と介護の複業化について「地域の安全・安心を守り、快適な



「建設と介護と農業の複業」について事例報告を行うセントラル建設。

シルバライフの提供につながる。今日、我が国に求められている究極の社会貢献事業」と強調。同社ではさらに17年春から農業分野（自然薯栽培）に進出した。阿部社長は「建設、介護、農業の新結合からなる地域になくてはならない独自のオンリーワン企業をめざす」と話した。

第3部では、富山県朝日町の集落で水道設備新設事業・小水力発電事業に取り組み深松組（宮城県）と、ガラス廃材の再資源化として新素材を開発した日本建設技術（佐賀県）が登場。朝日町での取り組みは、老朽化した水道施設の維持に行われているもので、信託方式で実施。過疎地でのインフラ維持の手法としても注目される。

## スクラムを組み、地域の経済を支え、雇用の拡大と技術の継承を

最後の第4部では、11年3月の東日本大震災後、地域材を使った住宅供給の取組みについて上閉伊地域復興住宅協議会会長の柏館旨緒氏と釜石地方森林組合参事の高橋幸男氏が事例報告を行った。被災後、米田雅子氏らからの呼びかけで釜石市、遠野市、大槌町（旧上閉伊地域）の林業・製材業・設計事務所・工務店など木造住宅に関わる事業者が集まり協議会（12年2月から「上閉伊地域復興住宅協議会」）を結成。「地元の山材を生かし地元の職人の手で、地元の方々の役に立つ」をモットーに復興住宅の建設に取り組んでき



「地域連携による住宅再建」をテーマに事例報告を行う上閉伊地域復興住宅協議会会長の柏館旨緒氏。



「地域材を使ったスクラムかみへい住宅」について事例報告を行う釜石地方森林組合参事の高橋幸男氏。

た。設計施工の標準化などで相場よりも4割ほど価格を抑えた自立再建住宅をこれまでに56棟受注（完成45棟、設計・施工中11棟）した。

また、今年9月に開催されるラグビーワールドカップの会場となる「釜石鶴住居復興スタジアム」の木製シートや木製トイレ、ビップルームなど諸室8棟にも地元の木材を活用。高橋氏は、地域の森林・林業で雇用拡大、地域経済への貢献、間伐面積の拡大などが期待できるとした上で、最後に「One for all, all for One」（一人はみんなのために、みんなは一人のために）を合言葉にスクラムを組み、地域の経済を支えながら雇用の拡大と技術の継承に努めていきたい」と結んだ。（本誌／千葉茂明）